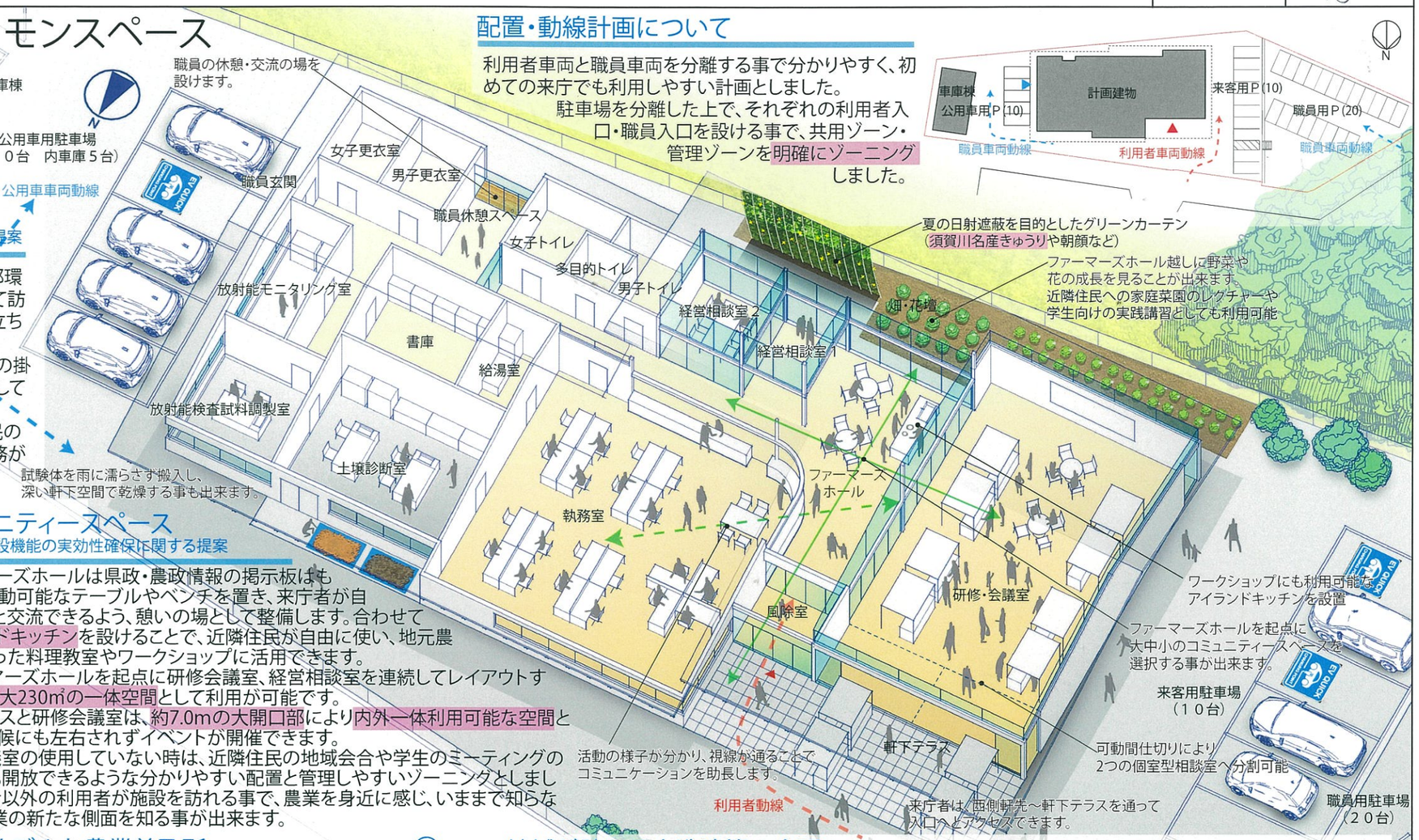
「人」と「農業」と「まち」をつなぐコモンスペース

奥州街道の宿場町として発展してきた須賀川市の歴史は、多くの人を受け入れてきた歴史でもあります。住宅団地内に位置する本計画地では、就農者はもちろん、近隣住民、学生、さまざまな人を受け入れる事が出来るような建築を提案します。「人」と「人」、「人」と「まち」が繋がることで、新たな芽が出る"きっかけ"を創出します。

1 「まち」と「農業」をつなぐ軒下の中間領域

（１）周辺地域との共生する地域の施設の在り方に関する提案

・住宅団地の一角に位置する本計画地では、人と車通りの多い東部環状線に向けて、建物の顔となるエントランスを設ける事で、はじめて訪れる来庁者にも分かりやすく、近隣住民や学生も普段から気軽に立ち寄れる配置計画とします。
・玄関の隣のアクセスしやすい位置に軒下テラスを配置して、屋根の掛かった屋外スペースとして、ワークショップ時利用したり、車寄せとしての使用する事が可能です。
・執務室を住宅団地に面した北側に配置する事で、職員と近隣住民のコミュニケーションのしやすさ、また近隣住民にとっては日々の業務が見えることで、親しみやすい施設となるよう配慮しました。

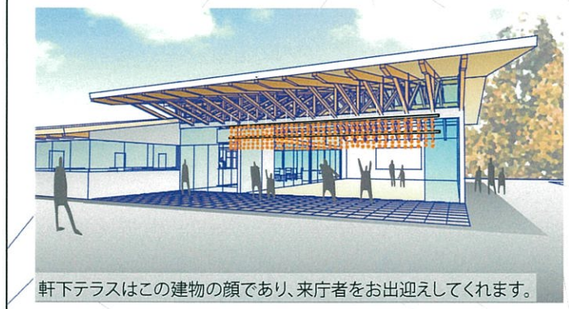


配置・動線計画について

利用者車両と職員車両を分離する事で分かりやすく、初めての来庁でも利用しやすい計画としました。
駐車場を分離した上で、それぞれの利用者入口・職員入口を設ける事で、共用ゾーン・管理ゾーンを明確にゾーニングしました。

2 「ひと」と「農業」と中心とした多様なコミュニティースペース

（２）次世代農業普及所としての施設機能の実効性確保に関する提案

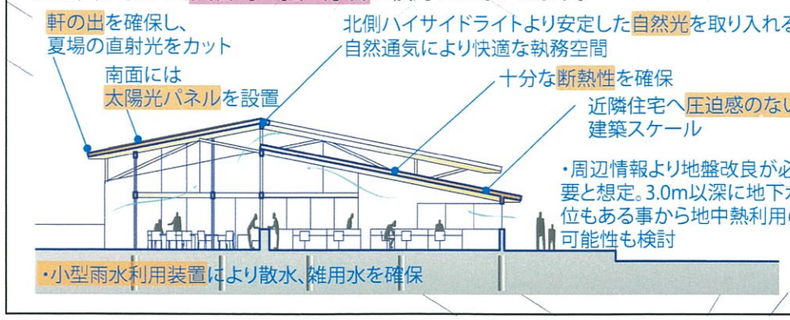

軒下テラスはこの建物の顔であり、来庁者をお出迎えしてくれます。

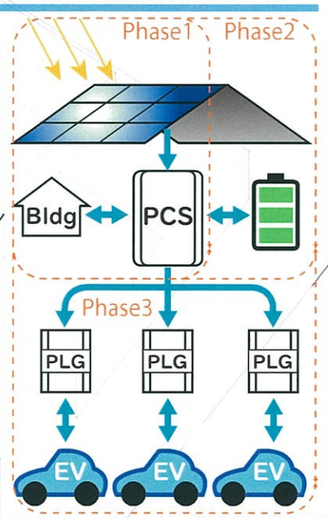
・ファーマーズホールは県政・農政情報の掲示板はもちろん、移動可能なテーブルやベンチを置き、来庁者が自由に職員と交流できるよう、憩いの場として整備します。合わせて、アイランドキッチンを設けることで、近隣住民が自由に使い、地元農産物を使った料理教室やワークショップに活用できます。
　ファーマーズホールを起点に研修会議室、経営相談室を連続してレイアウトする事で、最大230㎡の一体空間として利用が可能です。
・軒下テラスと研修会議室は、約7.0mの大開口部により内外一体利用可能な空間として、悪天候にも左右されずイベントが開催できます。
・研修会議室の使用していない時は、近隣住民の地域会合や学生のミーティングの場としても開放できるような分かりやすい配置と管理しやすいゾーニングとしました。就農者以外の利用者が施設を訪れる事で、農業を身近に感じ、いままで知らなかった農業の新たな側面を知る事が出来ます。

3-1 ZEBの実現によりLCCを抑えたサステナブルな農業普及所

（３－１）その他本施設の計画において特に重要と考える提案（ZEBについて）

世界情勢の変化による燃料価格、電気代の高騰は今後も予想されます。
・自然の光と風を積極的に取り込みながら、断熱性能の高い屋根、壁、開口部により外熱負荷低減することで、パッシヴデザインを実現します。
・高効率かつセンシング機能付きの機器選定により徹底した「省エネ」と太陽光発電を主体とした「創エネ」により「ZEB」を目指します。
・省エネ適合性判定は、モデル建物法ではなく、標準入力法により申請をします。精緻な評価方法により建物の省エネルギー性能を隅々まで検証します。
・蓄電池、EV充放電器の採用も視野にいれ、イニシャルとランニングコストのバランスを図りながら、災害時に強い庁舎を検討をしていきます。



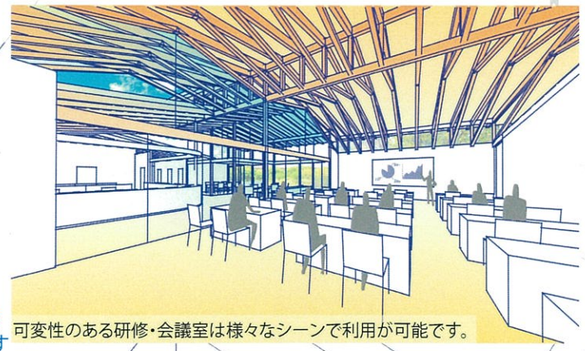


V2B(or X)の一例：段階的検討により本施設にとって、一番の最適解を見つけていきます

3-2 地域が誇れる木造建築の実現へ

（３－２）その他本施設の計画において特に重要と考える提案（木構造について）

・一般住宅で使用される流通材を用いながら、地元工務店でも施工可能な開放的な木造空間を実現します。
・主に中断面材のトラス構造、高耐力面材耐力壁や鋼材ブレースで構成し、シンプルかつ合理的な木架構を目指します。
・大断面集成材ではなく流通材を用いたトラス梁により木の材積の少ない「経済性」と木構造のならではの軽やな「意匠性」を両立させ、地域を象徴する空間を創ります。
・木造建築で使われる尺貫法にモジュールを統一することで、部材ロスを減少させて、コストの合理化を図ります。


可変性のある研修・会議室は様々なシーンで利用が可能です。

研修・会議室、ファーマーズホール、執務室とトラス梁が連続します。